

宮内卿の研究

鈴木和泉

はじめに

宮内卿は、鎌倉時代初期に活躍した女流歌人である。正治二年に後鳥羽院女房として召されて以降、『老若五十首歌合』（建仁元年二月）や『千五百番歌合』（建仁二年九月）など多くの歌合に参加した。その詠みぶりは清澄、理的で、時に女性らしい優美さに欠けるものの、後鳥羽院には才能を高く評価され院歌壇で活躍をした。宮内卿は院の期待に応えたいという思いからか詠作に日夜没頭するが、身を顧みないほどに一心不乱に打ち込んだため^{注1}には病に臥し、わずか二十歳ほどの若さ^{注1}で生涯を終えてしまったとされる。

宮内卿は、約四年の歌壇活動において三百六十首余りの歌を残した。その歌風について、早いものでは片山亨氏が「宮内卿^{注2}—新古今の歌人」（『国文学攷』二十二卷・昭和三十四年十一月）の中で、色彩感豊かで絵画的、理的、新奇な語句を多用するなどの傾向を指摘しており、以降の研究者の多くはそれらの特徴について論を展開している。

しかし、それらの特徴がはたして彼女の歌風の本質なのだろうか。たとえば、次のような歌がある。

かすみ

1 行くさきの里をしらす夕煙霞のそことやがてなりぬる

（正治後度百首・春・八〇三）

ゆき

2 さびしさをとひこぬ人の心まであらはれそむる雪の明ぼの

（正治後度百首・冬・八三九）

3 雲はるる山井の水にかけみえてそこより出づる夏のよの月

（老若五十首歌合・夏・一九〇）

（空^{注3}白）

4 花さそふひらの山風吹きにけりこぎ行く舟の跡みゆるまで

（仙洞句題五十首・九四）

1は、煙がもくもくと空へ上り、里を覆いつくそうとする光景を詠んでいる。はじめは炊煙だと認識できていたものが、ながめている間に充満して霞だと思われるほどに広がっていったのだろう。2では、夜が明けるとともに足跡一つない雪一面の

景色があらわになったことで、孤独な自分の元に訪れない人の薄情さまでもが浮き彫りになったと言っている。3では、雲が晴れて月が現れ出たところを水面を通して見ており、「そこより出づる」の詞から月が徐々に姿を見せる動きが感じられる。4では、湖上一面に散り敷いた花びらに残った舟の軌跡を詠んでおり、桜の花びらの中をゆつくりと漕ぎ進む舟の姿が想像される。

注目すべきは、いずれの歌においてもゆつたりとした時間の流れが感じられることである。時間が経つにつれて景色が変化した対象物が移動する様子が表現され、詠歌主体が光景の推移をじっくりと見つめているように思われる。こうした傾向は、この四首のみにとどまらずほかの歌にも表れている。

そこで本論では、景色の変化や対象物の移動など光景の推移を捉えた歌を切り口に、宮内卿の歌風について考察したい。

一 景色と時間

前掲の「行く里の」「さびしさを」の歌では、見ている景色にだんだんと変化が表れる様子が描かれていた。まずは、そのような景色の変化を捉えた歌を詳しく見ていき、宮内卿が光景の推移についてどのように詠んでいたのかを考えたい。

まずは、『新古今集』にも入集した次の歌である。

山家暮春

柴の戸をさすや日かげの名残なく春くれかかる山のはの雲

(通親亭影供歌合・一〇七)

夕暮れ時の山の情景を捉えた歌だ。「さす」には「戸を鎖す」と「光が差す」、「かかる」には「春が暮れつつある」と「雲が山の端にかかる」が掛けられ、また「名残なく」には、夕の名残と春の名残が込められている。先ほどまで差していた西日も今は消え、山の端にかかっている雲にほんのわずかに残る光もしだいに消えゆくこうとしている。詞を重層的に駆使して、時間の経過にともなう景色が変わっていく様子を描き出している。

あかつき

見るままにあけゆく空のけしきかなとは山のはのひまもあらはに
(正治後度百首・雑・八六一)

先ほどまで霞んでいた山の稜線が、夜が明けるにしたがってはっきりと見え出した状態を捉えている。「見るままに」という詞にその光景を観察している詠歌主体の視線が表れており、山の景色がどう変わっていくこうとするのかに対する好奇心を読み取ることができる。

山花未遍

見わたせばふもとばかりにさき初めて花もおくあるみよし
のの山
(仙洞句題五十首・一七七)

花が咲き始めたのは麓だけで、山の奥の方ではまだ花が咲いていないことを詠んでいる。花が咲きつつある開花の中途の状態を、「ふもと」と「おく」の対比によって写し出している。「花もおくある」という表現について、慈円に「よしの山霞も深く分入れば花のおくある春のあけほの」(正治初度百首・

春・六一四)があり、これを参考にしたのかもしれない。ただし、慈円歌が花が霞の向こうに隠れていることを詠んだ比較的単純な趣向である一方で、宮内卿歌は、麓と山奥の対比による空間的な興行きと、開花の時期の前後という時間的な興行きを同時に表出させており、いずれ山奥の花たちも咲き出すだろう未来の時間をも見ている。宮内卿にとつて、今日の前にある景色はただその一瞬のものではなく、前後の時間のつながりの中に属するものであるという意識が強いのではないだろうか。現前の景に異なる時間を見出すという特徴は、次の歌にも表れている。

うすくこき野辺のみどりの若草に跡までみゆる雪のむら消え
(千五百番歌合・春一・二二三)

さみだれ

山の井のすそ分けいでしざざれ水いづくなるらん五月雨の
(正治後度百首・夏・八一九)

前者は、若草の緑の濃淡から雪はどこから早く解けたのかを推し量ったもので、すでに解けきつたはずの雪景色が目には浮かんでくるようである。後者は、以前は認識できていた「ざざれ水」が五月雨の中に消えてどこにあるか判別できないことを詠んでいる。どちらも目には見えているのは現在の光景ながら、そこから時間を巻き戻して過去の状態を重ねて見ている。宮内卿にとつて、空間と時間は切り離すことのできない要素であったのだろう。目の前に広がっている景色はどんなことが起こった結果で、これからどう変わろうとするのか、自らを取り巻く自然

環境に対する好奇心の強さがうかがえる。

また、宮内卿は気象の変化にも敏感であった。

衣手にすずしきかぜをさきだててくもりはじむるゆふだち
の空
(千五百番歌合・夏二・八八二)

ほどもなくかぜのけしきもあらちやまみねよりわけてつも
るしらゆき
(同・冬一・一八七二)

はれぬるかたちろく雲のたえまよりほし見えそむるむらさ
めの空
(同・雑一・二八三四)

「衣手に」の歌では、まず自らの袂に吹きかかる風に天候の変化を予感して、だんだんと雲が広がりはじめた空を見上げている。「ほどもなく」の歌では、まもなくして風が強くなり、雪が積もってきた様子を詠んでいる。「はれぬるか」の歌では、勢いが衰えてきた雨雲の切れ間から姿を現した星を見ている。どの歌も、見ているうちに天候に変化が現れたことを詠んでいるが、ここで注目したいのは、「くもりはじむる」「見えそむる」など、動作の開始を意味する「はじむ」「そむ」を用いていることである。これは、変化が起こったはじめの時点でいち早くそのことに気づき、これから景色が変わっていく経過を見守ろうとする態度の表れではないか。たとえば、「そむ」を用いた歌として次のようなものがある。

こほり

冬の池は月すむ夜はにさえそめてかげよりむすぶうす氷か
な
(正治後度百首・冬・八四五)

凍てつく冬の池を詠んだ歌だ。「かげよりむすぶ」の解釈は、

『月詣』の「立田川きしの山ぶき咲きぬればかげより波ぞをりはじめける」(巻三・二二七・平経正)が参考になる。経正の歌では、「かげ」を「水面に映った山吹の姿」としてそのあたりから波が寄せ返っていることを詠んでいる。宮内卿歌も、「かげ」は「水面に映った月の姿」を指し、水面に映った月のあたりから水が徐々に張っていくさまを詠んだのだろう。第三句に「さえそめて」と「そむ」を使った動詞を用いており、空気が冷えだしてきたことを敏感に感じ取っているのが分かる。この語はこれ以前にも例があり、家隆の「かきくもりみぞるそらやさえそめてこほりもはてぬ時雨なるならん」(六百番歌合・冬・五二二)の「空気が冷えたことで水が凍る」という趣向に類似している。空気が冷えてきたのと同時に水面が徐々に凍りはじめてきたことをいち早く察知している点に感覚の鋭さが見て取れる。この歌においても、先に見た気象の変化を詠んだ歌と同様、一つの現象について早い段階で変化に気づき、そこから徐々に景色が移ろう様子を見届けようとしているものと考えられる。

宮内卿はこのほかに、

かすみ

春といへば日影もしるき気色より心までこそかすみそめけ
れ (正治後度百首・春・七九九)

いつしかとはるの日かげにゆききえてこゑたてそむる庭の
松かぜ (千五百番歌合・春一・一二三)

神無月ゆふ日のかげになりにけりあらだちそむるおきつし

らなみ

(同・冬一・一八一二)
などの「はじむ」「そむ」を含む歌を詠んでおり、自然現象の微妙な変化にも気づきうる鋭い感覚をそなえていたことが想像される。

こうした景色の変化を詠んだ歌からは、宮内卿が時間を意識的に捉え、時間の経過と共に景色が徐々に変化していく過程を描き出すことに強い関心があったと考えられる。

二 季節の移行

ここまで夜明けや日暮れ、降雪、水面の凍結といった一現象に対する歌を扱ったが、さらに規模の大きい季節の推移を捉えた歌について取り上げ、景色の変化に対する宮内卿の態度について考察を深めていきたい。捉えにくい季節の微妙な変化に対して、どのような歌を詠んでいるのか。

まず、冬から春への移行を詠んだ歌として次の二首がある。

かきくらしなほふるさとの雪のうちにあとこそみえね春は
きにけり (老若五十首歌合・春・六)

ゆきまわけまだうらわかきみどりかな草のはつかにはるは
なれども (千五百番歌合・春二・二八三)

冬と春、二つの季節を引き合いに出して季節の境目の情景を詠んでいる。「かきくらし」の歌では、雪が降る中ではっきりと目には見えないがたしかに春が来たことを感じ取っている。「ゆきまわけ」の歌では、雪の間からのぞく若草に春の到来を感じてるものの、まだ冬が去っていないと考えている。それぞれ

「あとこそみえね」「はつかにはるはなれども」といった言い回しに、冬とも春ともはっきりとは言い切れない微妙な頃合いが表れているが、それでも感覚を研ぎ澄ませて春の到来を把握している。季節が移りつつあるどっちつかずの境界線上に位置を設定している点に特徴があるように思われる。

かたえさすおふのうらなしはつあきになりもならずも風ぞ
身にしむ
(千五百番歌合・夏三・一〇〇二)

この歌では、夏から秋にさしかかろうとした頃合いを詠んでいる。「片方の枝がさしのびている麻生の浦の梨がなっているかどうかに関わらないように、初秋になっていてもいなくても、風は初秋のように身にしみることだ」というのであるが、この歌の妙味は「はつあきになりもならずも」という詞にある。「なりもならずも」は万葉集で初出したのち、「をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはむ」(古今集・巻二十・東歌・一〇九九・よみ人しらず)の歌によって注目されるようになった。宮内卿も「なりもならずも」の響きに触発されたのだろう、この古今歌を本歌に詠作したようである。宮内卿と同時代の信実と実朝も次のような歌を詠んでいる。

梨

六帖題

かた枝はなりもならずもつぎなしのおもひあへばやねては
かたらふ
(夫木抄・巻二十九・一三九四三・藤原信実)

恋歌中に

我がやどのませのはたてにはふうりのなりもならずもふた
りねまほし
(金槐集・恋・四一四・実朝)

「梨」や「瓜」にことよせて恋の成就の如何を「なりもならずも」の詞に託しており、「二人の仲がどうなるかわからないがまずは共寝をしたい」とする本歌の古今歌の意味合いをそのまま受ける。一方で宮内卿歌は、本歌にある恋の気分はなく、「なりもならずも」が含むのは初秋に季節が移行したかどうかという問題である。秋になっているのかいないのか。この歌においても季節の境目が設定されている。

また、同じく夏から秋への移行を詠んだものとして、

夏ごろもたもとに秋のなみかけてみそぎにふくるさ夜の河
かせ
(千五百番歌合・夏三・一〇三二)

草野秋近

秋風やまだきたつらむ夏衣すそ野の草は色付きにけり

(影供歌合・四)

初秋風

六月やてる日にいとふころもでもみになつかしきあきのは
つ風
(八幡若宮撰歌合・四)

がある。「夏衣」「六月」「てる日」といった詞から夏が終わりにきっていないことがうかがえ、特に「秋風や」の歌においては、第二句で秋は「まだき」と明示している。しかしそこに、「秋のなみ」「あきのはつ風」がかかったり、「すそ野の草」が色付き始めたことよって秋の気配をかすかに感じとっていることに留意したい。やはりどちらの季節とも言い切れない境界

線に立ち、その上で新しい季節へと変化する時を逃さないように感覚を研ぎ澄ませていくような歌である。

ここまで四季の境目を詠んだ歌を見てきたが、冬と春、夏と秋、といった二つの季節を詠み込むことでその移り変わりを描いていた。宮内卿はさらに、三つの季節を引き合いに出した歌も詠んでいる。

にははふゆこずゑはなつのこちちしてはるにもあらず花ぞ
なり行く
(千五百番歌合・春四・四六二)

「ふゆ」や「なつ」の語も見えるが、時期としては暮春の光景である。一応はまだ春であるにもかかわらず、「はるにもあらず」とする点に落花を惜しむ気持ちが表示された歌だ。「にははふゆ」という表現は、西行の「花のゆきのものにはにつもるとあとつけじかどなきやどといひちらさせて」(山家集・一四五九)や、定家の「さくらいろいろのにははるはるかぜあともなしとはばぞ人のゆきとだに見む」(千五百番歌合・春四・四七〇)などと同じで、庭に散り敷いた花びらを雪と見立て、まるで冬の頃の庭模様だと言っているのだろう。また、「こずゑはなつのこちち」というのは、次の歌に通じるものがある。

題しらす

にはの面は月もらぬまでになりけりこずゑに夏の影しげ
りつつ
(新古今集・卷三・夏・二四九・白河院)

夏の時期、月の光が漏れてこないほど葉が茂っている様子を描いている。宮内卿歌も同様に、梢に葉がたくさん茂っているさまに「なつのこちち」を感じているのだろう。季節は春であつ

て、もう冬でもないしまだ夏でもない。しかし、春を象徴する花が散り、愛でるものが消えつつある今となつては、「はるにもあらず」、どの季節でもないように感じてしまうのである。三つの季節を表出しながら、春という一つの季節が終わりゆく様子を捉えた歌であつた。

いにしへに花もみぢもなりはててゆきにぞやどの木ずゑ
をばまつ
(千五百番歌合・冬二・一八四二)

春秋の景物が「いにしへに」過ぎ去つたと言ふことで、春から秋、そして冬へといった季節の推移がよく表れており、冬の景物である雪を期待する気持ちが一層強く感じられる歌になっている。(花も紅葉もない景色)は和歌の中でたびたび詠まれてきたもので、たとえば、「ふる雪はきえでもしばしとまらなん花もみぢも枝になきころ」(後撰集・卷八・四九三・よみ人知らず)や、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとま屋の秋の夕暮」(新古今集・卷四・秋上・三六三・定家)があり、定家歌の、はじめに花や紅葉の鮮やかな景を表出させて、それを「なかりけり」と一瞬にして消滅させる手法には通じるところがあるだろう。また後撰歌では、雪を花や紅葉に代わる景物として捉え、「消えないで少しの間とどまっついてほしい」と言っている。宮内卿の歌はこの後撰歌が本歌だろうが、問題は下句の「ゆきにぞやどの木ずゑをばまつ」という表現である。すでに雪が降っていた本歌と異なり、まだ雪も降っていない、つまり花や紅葉どころか雪すらも何もない状態に対面し、いわばどの季節とも言えないような時を描いている。それでも

「まつ」と言うことで、これからやってくる冬の雪を待ち迎えるようとしている様子がうかがえる。

宮内卿はこれら二首の中で、季節の景物がなくなるとうとしている、あるいはまだ現れずに今は何もないような状態を詠んでいることから、やはりどの季節とも言えないような微妙な位置に立っていると考えられる。ここにも、季節の終わりとはいまを確実に捉えようとする宮内卿の意欲が読み取れるだろう。

前述のように、宮内卿は現前の景の中に流れる時間を意識的に捉え、一つの景色が変化する過程を描くことに注力していたと考えられる。そしてその傾向は、夜明けや日暮れ、気象などの日常的な自然現象だけでなく、より感知しにくい季節の移行に対しても見受けられた。どちらの季節とも明言できない微妙な境界線に立つことによって、些細な変化さえも見逃さぬように注視していたと思われる。

三 遠ざかるものたち

景色の変化に対する宮内卿の和歌を見てきたが、そこには一つの景色が変わりゆくさまを逃さず見届けようとする視線が存在した。時間の経過に伴って景色がどう変化するかに対して強く興味を持ち、感覚を研ぎ澄ましてそれを確実に捉えようとする姿が想像される。

次に、対象物が移動していく様子を詠んだ歌を取り上げることで、光景の推移に対する宮内卿の態度について考察を深めていきたい。前掲の「雲はるる」「花さそふ」の歌では、雲が晴

れて月が現れた光景や、舟が漕ぎ去る動的な情景が描かれている。このように宮内卿歌には、時間の経過にしたがって対象物が一方からもう一方へと移る光景を描いたものが多くある。中でも特徴的なのは、ある一つのもが遠くへと離れていく様子を詠んだ歌である。

和歌所にて 釈阿に九十賀たまはせける時の屏風に

はるばるといや遠ざかるあま小舟ながむるはては霞なりけり
(続後拾遺集・卷一・春上・三五)

遠くへと消えていく舟の行方を追った歌だ。宮内卿はこの歌のように「遠ざかる」を用いた歌を六首も詠んでおり、遠く離れていくものに関心があったと考えられる。「ながむるはて」という詞には、「見続けたその最後」という時間的な「はて」と、「かなた先の方」という遠い距離感を表す空間的な「はて」と、両方の意味合いが含まれているように感じる。舟が漕ぎ進む過程を眺め続け、しまいには霞の中へと消えていく。そこには、舟の行方に対する興味関心がうかがえる。

遠山暮風

ながめやる峰のあらしやはらふらむ夕ある雲のとほざかり

行く
(和歌所影供歌合・二五)

「ながめやる」と視界を設定した上で、雲がその視界のはるか遠くへと移っていくさまを詠んでいる。「夕ある」は、夕暮の時分に山にかかった状態を指す。「風・嵐が雲を払う」のは当時多くあった表現で、

秋

山風にゆふゐる雲をはらはせていづるよりすむ秋のよの月

(正治初度百首・八四九・隆房)

雲はらふかぜにあはれをさきだてていづるもしるき山のは
の月
(千五百番歌合・一二七八・隆信)

永承四年内裏歌合に

月かげのすみわたるかなあまのはら雲ふき払ふよはの嵐に

(新古今集・卷四・秋上・四一一・経信)

などがある。特に隆房歌は、「夕ゐる雲」を風が払うさまを詠んでおり参考となつているかもしれないが、いずれの歌も主眼は現れ出た月の美しさにあり、宮内卿のように雲そのものの動きに関心をもつて見つめる視線がない。また雲が「遠ざかる」という表現だが、「遠ざかる」という動詞の主語に「雲」を用いた例は見られず、宮内卿特有の珍しい用法であつた。

のきしろき月のひかりに山かげのやみをしたひてゆく蛍かな
な
(千五百番歌合・夏二・八五二)

蛍が白く差す月の光を嫌つて、山陰の闇を慕つて飛び去るさまを詠んだ歌である。この歌において、詠歌主体は家の中におり、そこから山の向こうへと向かつていく蛍の光を見ていると考えられる。やはりここにも、遠ざかるものに対する関心とその行方を追おうとする態度が見受けられる。

四 雲の行方

ところで、前述のように「雲」が「遠ざかる」という表現は、宮内卿以外に見られない珍しい表現であつた。「雲」は当

時の歌壇において、雨・雪を降らせるものとしてだけでなく、さまざま機能をもたせて詠まれていた。『新古今集』の中では、次のような用法が見受けられる。

内大臣に侍りける時、望山花といへる心をよみ侍りける

1 しら雲のたなびく山のやまざくらいつれを花と行きてをら
まし
(卷二・春下・一〇二・家隆)

千五百番歌合に

2 いまよりは木のはがくれもなければども時雨に残るむら雲の
月
(卷六・冬・五九七・具親)

千五百番歌合に

3 ながめわびそれとはなしにものおおもふ雲のはたてのゆふ
ぐれの空
(卷十二・恋二・一一〇六・通光)

題しらず

4 有明やおもひいであれやよこ雲のただよはれつるしののめ
のそら
(卷十三・恋三・一一九三・西行)

千五百番歌合に 撰政太政大臣

5 めぐりあはむかぎりはいつとしらねども月なへだてそよそ
のうき雲
(卷十四・恋四・一二七二・良経)

「雲」は、1のように花の見立てとして、あるいは2、5のように月などの景物を覆い隠すものとして機能するほか、4、5の「よこ雲」「うき雲」として興を添えたり、3、5のように「雲のはたて」「雲のよそ」の形で遠いことを示唆したりとさまざま働きをしている。

しかし、今挙げた五首を見ても、一首の主眼が雲の動きにあるものはない。新古今当代、「遠ざかる」雲どころか、雲それ自体の動きを詠んだ歌は珍しかったようで、たとえば、

夏歌とてよみ侍りける

雲まよふ夕に秋をこめながら風もほにいでぬ萩のうへかな

(新古今集・卷三・夏・二七八・慈円)

ながめやる霞のすゑはしら雲のたなびく山の明ぼののそら

(正治初度百首・春・二〇九・式子)

のように、動いている状態の雲を描いた歌もあることにはあるが、その多くが「まよふ」や「たなびく」といった特定の動詞とともに使用され、定形化した表現になっている。そうした中で、雲には珍しい独自の表現を用いて、雲が移動する様子を目で追っている宮内卿歌はひとときわ個性が光っている。

宮内卿は、「ながめやる」の歌のほかにも、雲の動きを注視した歌を残している。

しぐれつる木のした露は音信れて山路の末に雲ぞ成行く

(老若五十首歌合・冬・三二四)

露の伝う音が聞こえることから、主体は木の近くに位置していると思われる、先ほどまではその場所で雨を降らせていた雲が、山道を行き過ぎてはるか先へと移っていく過程を見つめている。「山路の末」という詞には、はるか遠くまで雲の行く先を追いかけようとする意志が表れているだろう。また、「雲ぞ成行く」の表現は、

業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむ

ることありてしばしのあひだひるはきてゆふざりはか
へりのみしければよみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるも
のから
(古今集・卷十五・恋五・七八四)

桜

ながめこし霞のそこのしら雲の花になり行くみよしののや
ま
(石清水若宮歌合・二二・道具)

などに見受けられるものの、「あま雲」の歌は、ある人が雲のように遠くの存在となってしまうこと、「ながめこし」の歌は、雲が花に変化することを指して「なりゆく」を使用しており、雲自体の動きをさして「なりゆく」と詠んでいるのは宮内卿だけである。ここにも、独自の表現で移りゆく雲の行方を見つめる宮内卿の個性が表れているだろう。

まどちかくみねのまつかぜおとづれてのきよりしたをかよ
ふしら雲
(千五百番歌合・雑一・二七四四)

窓近くで松風の音を聞き、軒下の方を雲が通り過ぎていくのを捉えた歌だ。歌の構成は、先に見た「しぐれつる」の歌と類似しており、まず近くで音を聞いて、そのあと通り過ぎてゆく雲の動きを目で追っている。この歌で注目すべきは、下句「のきよりしたをかよふしら雲」だ。「雲」に「通ふ」と言った例がないこともそうだが、何より「軒より下」という表現が問題で、この歌が詠出された『千五百番歌合』において、判者の前権僧正は「めつらしき軒より下の白雲に」という判詞を残している。この詞が言うように、「軒下の雲」を詠むことはなくこ

の歌のほかにも用例は見られない。軒下の雲ということは主体の位置は山家なのか判然とはしないが、やはりこの歌においても近くから遠くへと通り過ぎていく雲の動きを捉えている。

また、「雲の晴れ間」という形で、雲の動きを見つめた歌もある。

雨後月

月を猶まつらんものかむら雨のはれ行く雲の末のさと人

(仙洞句題五十首・一三三)

空を媒介に遠くの里人の心情を思いやった歌で、ここでは里から里へ移動する雲の晴れ間が描かれている。作者のいるこちら側の空では、すでに雲が晴れて月が見えているが、だんだんと広がっていく雲の晴れ間を見続けていると、しかしはるか遠くの里の上空では、まだ晴れずに雲が覆いかかっているのである。「雲の末」の詞は、前掲の「しぐれつる」の歌における「山路の末」同様、見えなくなりそうなほど遠くまで雲の行方を追おうとする宮内卿の視線が感じられる。また、この歌の「月の出を待つ里人の心を思う」という趣向は、躬恒に「ここに又わがあかぬ月を山のはのをちのさとはおそしとやまつ」(古今和歌六帖・一帖・秋・一七四)があるが、躬恒歌からは雲がしだいに晴れていくような動きは認められず、雲のなりゆきを見届けようとする宮内卿歌の特徴が浮き彫りになっている。

以上、宮内卿の「雲」歌を見てきたが、先に見た遠ざかるものを詠んだ歌と同様に、時間の流れと共に対象が移動していく

過程を描写していることに特徴があり、雲が視界の端へと遠ざかるまでその行方を追い続けようとする傾向があった。『新古今集』当代、雲の動きそのものに焦点を当てている歌が少ない中で、雲の行方を注視して遠ざかっていくさまを詠むことは非常に稀であり、宮内卿の遠ざかるものへの関心の強さを浮き彫りにしている。

五 鳥の声

ここまで見てきた歌では、遠ざかる対象物を視覚的に捉えようとするものであったが、宮内卿はそれを聴覚的に捉えようとする歌もいくつか残している。

そもそも、和歌の中で「遠ざかる」という語が和歌の中で使われる時にその対象になるのは、

あきかぜにやまとびこゆるかりがねのこゑとほざかるくも
がくるらし

(万葉集・卷十・秋雑歌・二二四〇・よみ人しらず)
郭公の歌とよめる

ひとこゑはさやかに鳴きてほととぎす雲ちはるかにとほざ
かるなり

(千載集・卷三・夏・一五九・頼政)
のように、雁やほととぎすなどの鳥の声が多かった。宮内卿歌にも、遠ざかっていく鳥の声を詠んだ歌がある。

ほととぎす
郭公さ月の空の雲間よりこゑもかすみて遠ざかるなり

(正治後度百首・夏・八一六)

この歌は、頼政の「ひとこゑは」を本歌にしていると思われる。しかし、頼政がほととぎすの声をはつきりと耳にしたのに対し、宮内卿は聞こえるか聞こえないか程度のかすかな声に耳を傾けている。その声も、立ち込めてきた雲にさえぎられて小さくなっていき、いずれ消えてしまうことを予感させる。雲という隔たりによって認知できなくなりそうな声に、耳を澄ませてなんとか聞き取ろうとしている。

晩山郭公

ほととぎす都をおもふ峰の庵の雲にはなるるあかつきのこ
ゑ（鳥羽殿影供歌合・一一）

この歌も、遠ざかるほととぎすの声を詠んだものだ。峰の草庵で時鳥の声に都への思いを触発されているが、近くに聞こえていたその声は遠い雲の向こうへと離れていってしまう。「雲にはなるる」という表現はこの歌が二例目で、初出は家隆の「明けわたるをじまの松の梢より雲にはなるるあまのつり舟」（老若五十首歌合・雑・四六七・家隆）である。家隆歌では主語があまの釣舟だが、「雲にはなるる」は「雲に向かつて遠ざかる」ことを意味しており、宮内卿歌においても、時鳥の声が雲の向こうへと遠ざかり距離が開いたことでだんだんと聞こえなくなること詠んでいると考えられる。

また、ほととぎすの声だけでなく、

かいへん

はま千鳥塩風よする浪の音にもるるこゑさへとほざかるな
り（正治後度百首・雑・八七八）

と、千鳥の声が遠ざかっていくさまを詠んだ歌もある。波音によって、姿は言うまでもなく、かすかに聞こえていた声でさえも小さくなって認知できなくなりつつあるが、その声をなんとかして聞き取ろうとしている態度である。

宮内卿は、視覚だけでなく聴覚的にも、遠ざかるものの行方を追おうとする姿勢をもっていた。雲や波音、遠い距離など、なんらかの隔たりによって聞こえなくなりつつある声に耳を澄ませて聞き届けようとしている。先に見た「はるばると」の歌においても、舟が霞の中に消えてしまう「はて」までその行方を追おうとしていたことから、遠ざかるものに強い関心を持ち、完全に感知できなくなる最後まで対象物の行方をなんとか捉えようとしていたと考えられる。

おわりに

光景の推移を捉えた歌を切り口にして、宮内卿の歌風について考えてきた。

まず、夕暮れ、夜明けや、空模様などの推移を詠んだ歌には、現象の変化について時間をかけてじっくり見つめる視線が存在することを明かした。宮内卿は時間の流れを意識的に捉え、景色が移り動いていく過程を表現することに対して意欲をもっていたと考える。中でも季節の移行を詠んだ歌においては、どちらともいえない季節の境目に立つことで感知しづらい微妙な変化さえも見逃すまいという態度が読み取れた。

次に舟や雲、鳥の声などの対象物が遠ざかっていく光景を詠

んだ歌を通して、移動する対象物が感知できなくなるまでその行方を見届けようとする特徴があったことを指摘した。この傾向は、自然現象や季節の変化を逃さず捉えようとする態度と同じものである。景色がどう変わっていくか興味を持っていただけこそ、対象物がどう移り動いていくかに対しても関心を持ち、その過程を描こうとしたのだろう。

これらのことから、宮内卿の歌風として、時間の流れに伴ったものが変わりゆく過程を写し出す特徴があると考えられる。宮内卿は目にした風景の中に一瞬にとどまらない連続した時間の流れを見ており、その景色はこれまでに何が起こった結果で、今はどのような状態で、これからどう変わっていくか、そうした移り変わりに強い関心を持っていた。そのため、景色や季節の推移、あるいは舟や雲などの対象の移動を詠んだ歌が多く、時には微妙な季節の移り変わりを感じ取り、時には感知できなくなるまで鳥の声を聞き届けようとしたのだろう。

宮内卿の歌には、自らを取り巻く外界に対する強い好奇心が感じられた。長明は『無明抄』の中で宮内卿の詠作態度について、「はじめより終りまで、草子、巻物取りよみて、切燈台に火ちか／＼ともしつゝ、かつ／＼書きつけ／＼、夜も昼も怠らずなん案じける」と記していた。それだけを見ると、宮内卿は常に書物にあたり、頭の中だけで詠作していたように受け取ってしまう。しかし、決してそのようなことはなかった。周囲に対して目を見開き、ものごとの微妙な変化をも捉えることのできる鋭い感覚を確かに持っていたのである。

付記

本稿は、卒業論文『宮内卿の研究―経過を見守る視線』をまとめたものである。

注

1 宮内卿の詠作態度については、長明が『無名抄』の中で次のように伝えている。

宮内卿は、はじめより終りまで、草子、巻物取りよみて、切燈台に火ちか／＼ともしつゝ、かつ／＼書きつけ／＼、夜も昼も怠らずなん案じける。この人はあまりに歌を深く案じて、病になりて、ひと度は死に外れしたりき。父の禅門、「何事も身のある上の事にてこそあれ。かくしも病になるまでは、いかに案じ給ぞ」と、諫められけれども用あらず、終に命もなくしてやみにしは、そのつもりにやありけむ。

(歌論歌学集成『無名抄』三弥井書店、一二九頁)
2 神尾暢子氏の「纂輯後鳥羽院宮内卿歌集稿」(『王朝』第三号・昭和四五年十月)及び「後鳥羽院宮内卿歌集稿補遺」(『王朝』第四号・昭和四六年八月)に、宮内卿の歌として計三百六十四首が収められている。

3 『新編国歌大観』の『仙洞句題五十首歌合』中では詞書が落ちているが、この歌が所収されている『新古今集』に「五十首歌たてまつりし中に、湖上花を」と見えるこ

4

とから、「湖上花」題であったと考えられる。

「なりもならずも」の詞は、「をやまだのいけのつつみに
さすやなぎなりもならずもなどふたりはも」（万葉集・
卷一四・相聞・三五二二・よみ人知らず）にて初出。